

看護技術の習得度向上を目指した授業改善の形成的評価

Formative assessment designed to enhance the skill levels of nursing students

豊場 沢子*** 平岡 斎士** 鈴木 克明** 都竹 茂樹**

Sawako TOYODA Naoshi HIRAOKA Katsuaki SUZUKI Shigeki TSUZUKU

独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院附属看護専門学校*

熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻**

Japan Community Health care Organization Chukyo Hospital Affiliated Nursing School*

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University**

＜あらまし＞ 看護学生1年生を対象とした看護技術授業科目にて、看護技術「ベッドメーキング」の習得度の向上を目指して授業改善を試みた。従来の授業から事前学習の変更、自己練習に使用する「技術チェックリスト」の活用法の訓練・授業内の技術の形成的評価を導入した。授業終了時の看護技術の習得度は、全体に向上したが、一番難度の高いと思われた項目については変わらなかった。習得状況から、変更点は一定の効果があったと推察されたが、習得度の低い項目からは、学生・教員間の「評価基準」に差があったと考えられ、評価基準を具体的に理解できる教授方法の重要性が示唆された。

＜キーワード＞ 授業分析 授業設計 インストラクショナルデザイン 看護教育

1. はじめに

看護基礎教育課程における確実な看護技術の習得は、卒業後、新人看護師が配属先で新たに習得すべきことの多い中、自信を支え、臨床現場の負担を減らすものであると考える。しかし、看護基礎教育課程の過密なカリキュラムにおいて、各看護技術について習得段階まで支援することは容易ではない。

したがって、看護技術の習得に向け効果的・効率的に授業を行い、自立的に練習に取り組む設計が必要である。筆者の所属する看護専門学校では、2015年度に1年生を対象に、授業で学習した看護技術の反復練習の機会として、当該看護技術のチェックリストを提示、「技術チェック」を目標に各自練習、一定期間後習得度をチェックするという取り組みを行った。この取り組みは、授業外学習を自立的に進めたが、「技術チェック」の習得度には課題があった。

そこで、看護技術を習得するための効果的・効率的な授業・自己練習の支援を目指すにあたり、2015年度授業を分析し2016年度改善案を検討、実施し、「技術チェック」の結果から、その効果と課題を考察した。

2. 研究の対象と方法

筆者の所属するA看護専門学校(3年課程)の1年生42名を対象に行った授業科目「基礎看護方法論Ⅰ」のうち担当の単元である「環境」を対象とした。なお、本単元の授業回数は5回、習得する看護技術として「ベッドメーキング」、「臥床患者のシーツ交換」がある。

2015年度の本授業を受講者のインタビュー結果、インストラクショナルデザインの視点をもとに分析し、2016年度の改善案を作成、授業・技術チェック(ベッドメーキング)を実施し、看護技術の習得度を2015年度の結果と比較した。

3. 授業分析・課題の明確化

2015年度本科目受講者のうち了解の得られた4名に自由面接法によるグループインタビューを行った。構成した内容は、＜「技術チェック」についてどう感じているか＞＜「技術チェック」に向け、授業外でどのように学習していたか＞＜「授業」・「技術チェック」について何をどう変えるとよいか＞とした。インタビュー結果から、自己練習の方法は市販教材の看護技術動画を視聴、上手な人がやっているのを見る、自己の技術を動画で撮影しチェック、学生の患者役からの指摘、

があり各自工夫していた。しかし、市販教材の動画については、学内の備品と異なることがあり、学内教員のデモンストレーションを希望していた。「技術チェックリスト」については、「はじめは言葉の意味を理解できていなかった」、「項目を読み落としてしまったことがあった」とことから、チェックリスト項目を正確に認識できていないことがうかがえた。

インストラクショナルデザインの視点では、看護技術という「運動技能」の特性をふまえ、「学習課題の種類と課題分析」(鈴木, 2002)の観点から検討した。2015年度は、看護技術の自己練習を意図的に「分けて練習」することは示唆していなかった。そのため、各ステップの習得が曖昧なまま、一連の技術を練習していたと推測された。「ガニエの5つの学習成果と学習支援設計の原則」(市川, 根本 2016)をもとに運動技能の指導方略を検討した結果、「学習の指針(事象5)注意点の指摘、成功例と失敗例の差の説明。イメージ訓練」の点からは、注意点の説明や正しい例のデモンストレーションを行うが、悪い例は提示していなかったため、意図的に取り入れデモンストレーションを行う必要があった。「完全習得学習」(市川, 根本 2016)の視点からは、現行の「技術チェック」は「形成的テスト」は行っておらず、最終段階で一度のみ行う「技術チェック」の機会しかない。授業時間内で自己の技術を形成的に評価する機会を設ける必要があると考えられた。

5. 授業改善内容

これらの分析結果をふまえ2016年度の授業改善案を検討、実施した。改善点は、①効果的・効率的な事前学習を提示すべく、「技術の方法を調べる」から「スライドや動画の視聴、ポイントを挙げる」へ変更した。②授業後に自己練習教材として提示していた「技術チェックリスト」を、授業時に提示し、教員の看護技術のデモストレーションを評価することによりチェック項目の技術の正誤の判断に役立てた。③技術のポイント箇所について、短時間ではあるが、技術の形成的評価として授業内で確認を行った。これまで一斉授業後は、授業外の自己練習に任せきりで習得状況を把握できていなかったが、これにより教員は習得状況を把握しアドバイスをしたり間違いを指摘したりでき、学習者にとっては技術の「形成的評

価」となり課題を認識できると考えた。

6. 結果および考察

技術の習得度は、2015年度と比べると一項目を除いて向上した。(図1) ポイント箇所である「頭元、足元の三角をゆるみなく作った」の項目については2015年度と習得度は変わらなかった。技術チェックした他教員から「基本形はできているので『ゆるみ』を少なく」との意見があった。また、観察者の学生と教員の評価に差があり、学生の評価が高かった。習得状況が改善しなかった原因として、技術の形成的評価時に、他のポイントではデモンストレーションを行ったが本項目では行っていない、教員が行う「悪い例」の提示の際、極端な「ゆるみ」の提示であったため、「ゆるみ」の有無の評価基準を具体的に提示できず、学習者の理解につながらなかった、と考えられた。

その他、課題として、より「ゆるみなく」するための方法(コツ)を手順として含める、下位の行動をふまえできるようになる学習手順を示す、評価項目、評価基準が理解できているか練習時に技術の前提知識の習得を確認できる要素があると良いと考えられた。

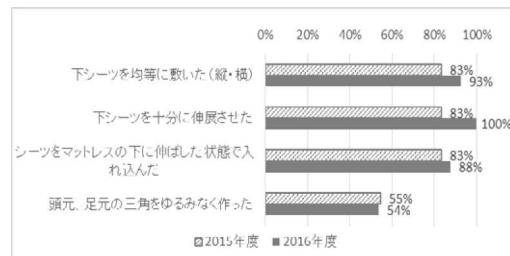


図1 「ベッドメーキング」習得度（「シーツを敷く」抜粋）

7. おわりに

今後は、課題をふまえ教授方略、教材（「技術チェックリスト」）を改善し、授業改善手法を他看護技術科目に適用させ効果を検証する。

参考文献

- 鈴木克明 (2002) 教材設計マニュアルー独学を支援するためにー, 北大路書房, pp71
- 市川尚・根本淳子 (2016) インストラクショナルデザインの道具箱 101, 北大路書房, pp72-73, 88, 228